

尊徳の教え 児童が熱演

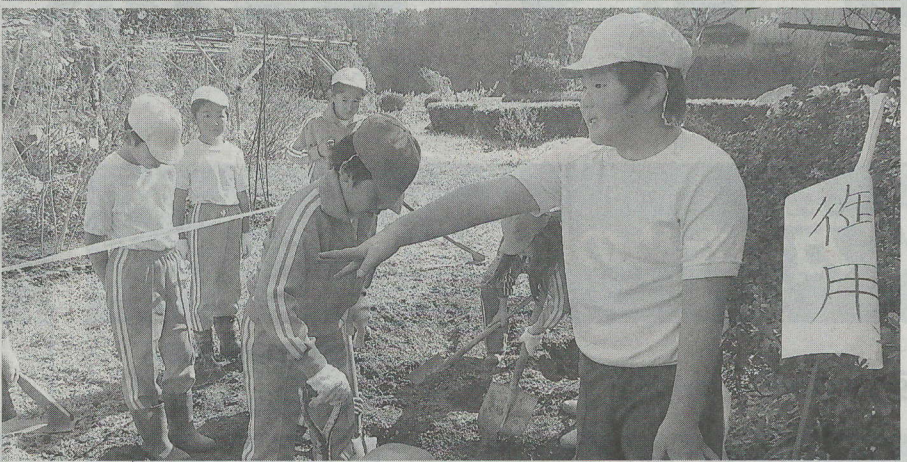
日光市立轟小(森屋一 郎校長、59人)の4年生13人が、11日に市内で行われた「全国報徳サミット」で、二宮尊徳の指導で村人たちがつくった「二宮堀」を題材にした劇を披露した。サミットには東日本大震災の被災地からも参加。児童たちは農村を復興させる様子を被災地への思いも込めながら熱演し、会場には大きな拍手が鳴り響いた。

日光・轟小 報徳サミットで劇披露



報徳学習発表

全国報徳サミットは尊徳にゆかりのある各地の自治体が集まり、尊徳の教えを今に生かして後世に語り継ごうというもの。23回目の今年も尊徳が生涯を終えた日光市で開かれた。メンバーには生誕地の神奈川県小田原市や真岡市のほか、東日本大震災で大きな被害を受けた福島県の相馬市



足跡学び 震災復興へ願い込め

や南相馬市、大熊町なども加わる。

轟小が披露した劇は相次ぐ飢饉で人口が減って疲弊する江戸時代の農村が舞台。荒地を尊徳の指導で力を合わせて耕し、用水路を掘って取水し、復興させる物語だ。

劇を演じるきっかけは社会科の授業。地域の先人たちがどのような願いを持ち、土地を切り開いていったのか。6月から足跡を見学し、地元の関係者から話を聞くなどして学んだことだった。轟地区は尊徳の「一村式仕法」のモデル地区で、歴史的な足跡が残っている。学校の運動場を囲むように流れる「二宮堀」と呼ばれる用水路(幅1・5メートル。深さ75センチ)もその一つで、今も地区の農業を支えている。

児童たちはまず尊徳の生涯を学び、ゆかりの深い旧轟村名主の狐塚昭子さん宅を見学。地元の人々の案内で近くの二宮堀の取水口まで歩いた。川の水を洞門で色々な方向に流す工夫を見た後、校庭の畑でスコップを使って二宮堀の掘削作業も体験。「機械もない時代によく掘った」と驚いた様子だったという。

「体験したことを形にした」という児童たちの願いに応え、担任で福島県出身の福田直美教諭(41)が劇の披露を発案。シナリオをまとめ、児童自らも振り付けや江戸時代の衣装を考えたと。

舞台では約800人を前に、児童たちが当時の農民の奮闘ぶりを熱演。「みんなが同じ気持ちで助け合うことこそが大きな力になる」と呼びかけた。尊徳が手がけた農村のように、震災の被災地も力強く復興できるとの願いを込めた。

「こんな素晴らしいサミットは初めて。温かい思いに励まされました」。劇の披露後に行われたパネルディスカッションでは、参加した相馬市や南相馬市など被災地の関係者から、こんな発言が続いた。

サミットが終わってから、日光市役所には被災地から感謝のメールが数多く届いている。「報徳サミットに参加し、こんなに感動したのは初めてです。全てのスタッフの方々に感謝申し上げます」など、児童の熱演ぶりに賛辞の声も寄せられている。

(梶山 天)

舞台上で劇を披露する轟小の児童たち。「みんなが同じ気持ちで助け合う」という尊徳の教えを伝えた日光市の今市文化会館(左)校庭にある農園では児童たちがスコップを手に二宮堀の体験をした日光市轟、轟小提供